いのちと地域を守る　毎月11日掲載　防災・減災のページ

■むすび塾に参加して　京都・向島ニュータウン

障害者は障害を隠そうと引きこもりがちだ。近所に誰も知られていない状況で、災害時に助かるだろうか。もっと積極的に社会と関わる必要がある。＝日本自立生活センター所長・矢吹文敏さん（70）

来日したばかりのころは、災害に対する緊張感があったが、今では薄れてしまった。それぞれの住民の立場を理解し、一緒に良い方向に進みたい。＝中国帰国者家族・大林爽香さん（41）

訓練を重ね、住民が災害時に助け合う関係をつくっていく必要があると痛感した。守る側と守られる側のコミュニケーションが大事だ。＝民生委員・高木春美さん（72）

災害が起きれば、大学も被災する。まずは学生を守らなければならないが、「同じ被災者として一緒に考えよう」というスタンスで地域と協力していきたい。＝京都文教大教授・杉本里子さん（60）

母国で地震体験のない留学生は、備えを怠りがち。日本語を話せない人も多いので、災害発生時のコミュニケーション課題だ。＝京都大大学院生のマダガスカル人、ステファン・ランドゥリアマナンツォアさん（29）

「カケアガレ！日本」と連動

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は2月22日、巡回ワークショップ「むすび塾」を宮城市伏見の向島ニュータウンで開いた。東北以外の開催も含めて通算41回目で、京都新聞社（京都市）と共催。河川の氾濫を想定し、要援護者へのサポートの方法を考えた。

地元の京都文教大、まちづくり協議会、障害者支援団体と連携し、避難ワークショップを実施。中国帰国者、留学生、障害者ら50人が、情報伝達や避難路を確認した。団地で初めて、帰国者と留学生向けの防災勉強会も開かれた。

河北新報社と東北大災害科学国際研究所、電通が共同展開する津波避難モデル事業「カケアガレ！日本」と連動し、住民ら50人は宮城県南三陸町、名取市、岩沼市で被災した3人と防災対策の課題を検討。住民ら40人が耳を傾けた。

河北新報社は地方紙連携による、むすび塾を昨年始め、京都は第3弾になる。

京都新聞社と共催 京都むすび塾

一時避難場所に集まり、点呼を取る中国帰国者たち

水害想定し避難場所へ

避難ワークショップでは浸水被害に備え、団地に住む中国帰国者や留学生、障害者18人が2階へ移動したり、避難場所の小学校までの経路を確認したりした。

大雨を降らせ、マグニチュード7・5の地震が発生し、近くの宇治川の堤防が決壊したと想定。民生委員や京都文教大の学生ボランティアが団地内を回り、住民に避難を促した。

重い言語障害があり、車いすを使用する平山真矢さん（47）は、団地1階のバリアフリー専用住宅に暮らす。学生と共に4階の空き部屋に避難したが、専用住宅と違い、入り口が狭く、段差も多い。初めて「空き部屋に入った平山さんは『暗かったらどうなるんだろう』と不安げに話した。

弱視の中田寿子さん（62）には、同大1年の千坂笑都帆（えみほ）さん（19）が付き添い、2階の自室から4階の段を通って6階に移動した。中田さんは「だいたいの段数を教えてもらうと安心して歩ける」と伝えた。

千坂さんは「誘導される側の気持ちを考える余裕がなかった」と反省した。

中国帰国者の中には、日本語に不慣れな人もいる。避難を呼び掛けた民生委員の高木春美さん（72）は、あらかじめ「この丸小学校へ避難します」などと書いた紙を用意した。帰国者は持ち出し袋を携えて小学校に移動。到着後、互いに袋の中身を確認した。

帰国者や留学生は、団地内で開かれた防災の基礎を学ぶ勉強会にも参加。災害に関する日本語の単語一覧と外国語対応の防災ガイドブックを使い、緊急時の避難の仕方などを確認した。

障害者、段差や誘導に不安

過去の被害知り備える

東北大災害科学国際研究所助手　保田　真理さん

自分たちの地域に起こりやすい災害を知ることが大切だ。東日本大震災の場合は、想定を大きく上回る津波が発生したために、甚大な被害が出てしまった。

向島では水害が懸念されているが、約400年前には伏見地震という大きな地震が発生している。

地理的要因によって、過去に起きた災害は必ず繰り返す。その技術では、いつ次の地震が起きるのか予測できないが、備えることが重要だ。

各階に水を備蓄するという簡単な取り組みは、すぐに始められる。建物は横に長い構造なので、各階ごとに安否確認を決めておくことも有効だ。できることから、少しずつ手を付けてほしい。

団地の中で中高生を見掛けた。いざというとき、彼らは力になる。学校などと巻き込んで、防災について話し合う機会をつくってみてはどうか。

境遇超え親睦深めよう

減災・復興支援機構専務理事　宮下　加奈さん

中国帰国者と日本人、障害者と健常者といった枠をなくせば、何かのときに助け合える自然な状況ができる。同じ境遇の人たちだけで集まることをやめ、団地の住民の間であの人は私と違うからという気持ちをなくす必要がある。地域の公民館は日以外は施設が、学校にあまり使われていないと聞いた。団地の一室を開放し、集まった高齢者が自由に話し合える場所をつくってはどうか。

ある大学は団地の一角を借り上げ、大学生に住まわせることで、コミュニティーの再生に取り組んでいる。日本人とインド人が互いの国の料理を教え合って、住民同士の親睦を深めている地域もある。

普段の交流がなければ、いざというときに協力するのは難しい。楽しいことから始めれば、交流の促進と活性化につながると思う。

向島ニュータウン1階に車いす46世帯

高層の団地が林立する向島ニュータウン。現在、約1300人が暮らす

向島ニュータウン一帯は、干拓地の埋め立て地。地盤が軟弱なため、近くを流れる宇治川が氾濫した場合、最大5mの浸水被害が想定される。1596年の慶長伏見大地震では死者1000人以上の記録が残る。

団地には10階建て以上の高層住宅が林立する。入居は1974年に始まり、ピーク時の90年には約1万2900人が暮らした。現在は約1万3000人まで減少し少子高齢化が進み、65歳以上の割合は3割を超える。1階には車いす専用住宅があり、46世帯が入居する。

住民団体の調査によると、中国残留婦人で永住帰国した人をその他から約300世帯が入居し、日本語や文化に不慣れな人も多い。

ニュータウンに隣接する京都文教大と地域住民が運営するまちづくり拠点が2015年1月、商店街に開設され、学生を含めた地域の交流が進んでいる。

団地では毎年3月、東日本大震災の避難者グループとまちづくり協議会などが「3・11メモリアルキャンドル」を開く。ことしも7日から311個の竹灯籠にろうそくをともし、犠牲者の冥福を祈った。